

# 琉球大学学術リポジトリ

米国管理下の南西諸島状況雑件 沖縄関係（毒ガス問題） 第一次移送(4)

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2019-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/43780">http://hdl.handle.net/20.500.12000/43780</a>

毒ガス移送計画調査研究報告(原水禁)

沖繩移設計画  
(46.5.6.14)

アメリカ局長

特別報告 第一次報告に補足した最終報告書

小山内宏・田村三郎 共著

# 沖繩における毒ガス剤兵器移送計画・レッド・ハット作戦に関する調査研究報告

加藤 正一

再発行 原水爆禁止沖縄県協議会

沖繩に於ける毒ガス剤兵器移送計画・レッド・ハット作戦に関する調査研究報告

軍事評論家 小山内 宏  
東大農学部教授 田村 三郎

われわれは、一九七一年一月八日より開始される「沖繩における米軍の毒ガス兵器の移送・レッド・ハット作戦」計画に際し、その毒ガス兵器と移送計画を調査し、それに対する安全対策を助言し、移送そのものを監視するための調査員として琉球政府よりの招待をうけたとき、まず次のような基本姿勢を確認した。

①毒ガス兵器は「危険物」である。従って、安全条件だけを掲げあげるといふやり方ではなく、むしろ、危険の現実を追究し、そこから如何にして危険を最小限に抑制するかを案出することを基本姿勢とすることにした。これは実際に正しかった。それは、今回の移送の対

となつたH.D.砲は、米軍も明示したように「一」には「毒物」(poison)であり、また「極毒物」(extremely)であつた。今回移送されるH.D.砲は、この二つを合せて「危険物」であつたのである。今も兵器は危険物であるがために、戦争において殺傷・破壊の勢力を持つものであり、兵器が絶対安全であるとは断言できない。従つて兵器が絶対安全なものと断言することはナンセンスである。かりでなく有害である。しかし、われわれは危険物であるという前提には立つが、あくまでもそれを先入観念として捉えつけ、最初から積極的につけるような主体的な調査には当たらないことを確認した。科学的調査というものを

いのは「琉球住民の安全」である。従つてわれわれは兵器そのものと移送作戦の安全度をもつて計画に対して「安全」といふ答えは出さない。琉球住民への安全対策の整備が前提すべき状態に達したときにおいて「安全」を認めるべきである、という姿勢を持つことに決めた。

現代科学の問題点は、人間の存在への認識を往々にして欠落することにある。公害の爆発的な顕在化はその具体的な実例であるが、それは沖繩における基地公害としても鮮明に現われているのである。軍火の公害問題の一つとして毒ガス問題に当たるべきであることを確認した。

さらに、われわれは沖繩における毒ガス問題を、国際法上からも捉えておかなければならないことを指摘しておくことにした。

一九三五年、スイス・ジュネーブにお





し、万一に海客各車両には非常用のスピー  
カーと無線機を、自衛隊に使用するメ  
ンブールック(作務機)等を通じては、松  
浦駐屯の自衛隊を待機させ、事故発生  
時には用務員にむけて警告を行なう態勢と  
することを明らかにし、警戒車には日本  
橋を待機する要員を待機せよと述べた。  
そして、作務機「安全対策」として  
は、水田の専断家「クレーン」博士ら  
の対策案の結核である「客のなかに選  
び出して、しっことして」が最も安全  
な「安全」を住民に勧告する、とい  
う意見を客車側は述べた。これに対し、  
われわれはアメリカ本土の住宅地帯と沖  
縄におけるそれの大きな相違と、アメリ  
カの道幅状況、例えばハイウェイ網の發  
達により人口密度地帯を回避して通行し  
得るバイパス路の存在などを指摘して、  
沖縄には同一の条件を適用すべきでない

ことを主張した。こうして「危険な住民へ  
の安全対策」については、双方の主張は  
全く平行線を辿るに至つた。  
⑤緊急避難の大きな変化、例えばは、被災  
地などにおける米軍側の警戒、または輸送  
に際しては天候に関する指示につい  
て、米軍側は、例えば第一次輸送隊の出  
発後、大雨などになった場合は輸送隊の  
進取を止め、第二次輸送隊は輸送を中  
止することなどの対策を示した。また、  
輸送に最も適した天候とは何時までかの  
問いとき大雨など輸送隊を妨害する条  
件のないときのみ輸送作業に専念を渡す  
程やかなとき、などを挙げた。これは當  
然、米軍側の輸送時における安全確保  
の条件として、緊急条件、が極めて重要  
なものであることを、米軍側が明らかに  
したものであった。

を強調し、その「安全確保」の遵守の  
如何について合意したところ、部隊内の  
安全確保のキーマンをもつドライバーを  
選定してこれに当たらせたため、安全運  
転は確保できると米軍側の意見を述べた。  
なお、コナチ(警備隊)が被災地より  
警備する米軍側が輸送隊上を通過する  
点も示したが、これに対し米軍側の輸送  
が輸送隊上を通過し、その発着をコン  
ロールすると述べられた。  
そして、米軍側も「輸送隊」の末期  
である天候確保における組み込み作業  
が最も安全確保を求められることを述  
べ、天候確保は隊員に警戒され、橋橋上  
には技術警備隊の火器用車と救急車が  
用意され、技術警備隊の要員を隊員が  
待機する。積込み作業の現場はコーン  
ト、ガードによって監視・管理され、万  
全の準備がとれることを要請した。そ  
して、橋橋上の安全を確保するために、  
輸送隊のドライバーは一旦、橋橋上の待  
機場に入らなければならない。H.D.隊員を警戒  
しては輸送の危険、警戒の準備を行なう

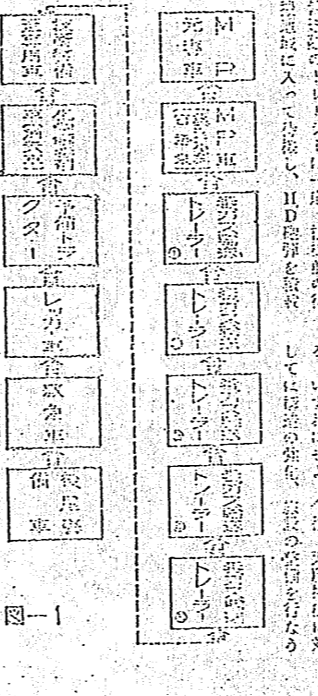
したドライバーは一台ずつ橋橋に入り、  
積み込み作業を行なうものである、と説  
明された。  
なお、天候確保に便しては一虎の陸揚  
け、積み出しには不足のない監視を思わ  
れたが、輸送隊の作業においては十分に  
はいられないと判断した。なぜなら軍車  
警備隊の輸送隊への警戒は、輸送隊の復  
は通行路は狭く、歩道は、歩道の強度に懸  
念がある。これは警備隊が歩道に相当の時  
間を要する、ということである。今回の  
H.D.隊員の積み込みは、輸送ドライバー  
一台分の所要時間が30分と計算されて  
いたが、現実には若干の遅延を生じた。  
危険物の積み出しには技術隊のより改善が  
望まれる。また、技術隊、大規模船の  
隊員に不十分であり、しかも万一海上  
の状況の変化、海客の警戒の場合、  
輸送隊が橋橋に待機して待機を中止せしめ  
る可能性などはいわれないと推定す  
る、いざいざ、今後、天候確保に対  
しては輸送の危険、警戒の準備を行なう

今回の輸送計画における「輸送隊」  
は、つぎのような輸送隊(Gang)によ  
って行なわれる。(付1参照)  
この隊列の上を一台のヘリコプターが  
飛び回り、指揮官は少尉はこれに指  
導し、金庫送作業を上から指揮し、警  
戒する。M.P.先頭車は原則として、隊列  
の四〇〇メートル前方を走る。輸送隊の  
車間距離は最大五〇メートルを維持し、

制隊員を連ね三〇〇メートルとする。  
そして、輸送隊の各車、カメラ、指  
針などについては速力を減らす。これら  
が一連作業の方式の概要であつた。  
これらの隊列を率いて輸送が行なわれ  
ば、今回の輸送作業はほぼ完了してしま  
う、と米軍側は説明した。  
われわれも米軍側の輸送計画は「安全輸  
送」と「安全確保」が必須条件であるこ  
うであることを述べた。

輸送隊の隊列の進んだことは、やはり  
安全とはいえないものであり、この点  
注意を喚起せざるを得ない。何故なら方  
一機隊上の事故でH.D.が水を汚染した  
りしたような場合H.D.の一部は通常、水  
面に漂い度々となつて油と同じように広  
がる。一九四四年、日本海ガス兵器を積  
んだ輸送隊がインフレーションが、その  
とき、このような事故が起きている。  
そのため、海中にとり込みは決して危険な  
ものである。この危険に気がつた米軍側  
は、この危険に気がつた米軍側は、  
海客の警戒を要することを要する。  
第二に、われわれの指摘した輸送隊  
の隊列の隊列な地点に緊急のアスファ  
ルトが敷きつめられていたが、これが危  
うに輸送隊の車間がふさがり、火  
きくように事故が起つてはかきで、火  
く、路上に相当な距離にわたって黒いア  
スファルトの危険が引かれていた。隊員  
の安全確保の上から、留意すべきことと  
である。

しかし、警備隊は米軍および沖縄の  
警備隊の両者の手によつて、輸送隊と  
その周囲の交通警備は計画的に行なわれ  
て、輸送隊は交通上の障害には全くあ  
りなかつた。しかし、輸送隊の通過した  
隊列上に積まれた車が二機とこたか



可きであり、それが十分にない得ない  
場合は、危険物の積込みには注意である  
とはいえない。  
しかし、車側の自主的な輸送上の進  
行計画(八月八日)および米軍のヘリ  
コプター(八月九日)によつて、われわれは  
輸送隊上にある問題を指摘した。第一  
に輸送隊上五つの危険が存在するこ  
と、第二に道路はカーブと傾斜面が多  
く、大小のカーブは十三ヶ所を数え、が  
なり坂道が三ヶ所あり、とくに天候への  
下りには長い急降下であり、第三に  
は道路の路肩に危険点があり、路肩に凹  
凸のあることも指ささねばならなかつた。  
これに対し米軍側は、第一の点に対  
しては事故の危険性の少ないことを指し  
示し、第二については安全確保によつて問  
題をなくすることができるとし、第三の  
点については、すでに数ヶ月前より輸送  
隊の路面の点検を、それを小石一つ  
の存在も調べたり方向とり、充分な  
整備を行なつてきたため不安は全くな  
い、と回答した。

しかし、われわれ現実の調査メモに基  
づいて道路状況について再び、緊急点を  
指摘し、例えば突発的に相当大きな穴掘り  
のあることとその正確な位置を述べ、一  
層の整備を要請した。そして、大小のカー  
ブの通過に際し、長大なドライバーが  
回り回れず、後部を路肩から滑り落ちるこ  
とが予測されることはいないか、傾斜面と  
く長い天候への下りに際し、岩瀝石に

危険とする路上の凹陥ポイントが、他の  
ポイントの窪みを受けて滑り落ちるこ  
とはないか、とも質問し、その回答は  
ない、との米軍側の答えを得た。  
だが、作務の当日は輸送隊は警備され  
て輸送時あらゆる他の車は進入を禁  
じられるのだから、その理由した道路上  
を走る場合、より道路上の安全確保のため  
と、道路の中央を走つてはどうか、とわ  
れわれは質問した。これに対し「はい、指  
揮は、よきアドバイスとして採用すべ  
い、と答へた。

しかし「輸送隊」において、その時  
運送日、輸送隊が回られた。第一に、安  
全確保の点について、米軍側は、われ  
れらが、訓練隊は必ずしもそうではな  
く、坂道などは輸送隊は必ずしもそうでは  
ない、と答へた。第二に、輸送隊は必ず  
しもそうではない、と答へた。第三に、輸  
送隊は必ずしもそうではない、と答へた。  
第四に、輸送隊は必ずしもそうではな  
い、と答へた。第五に、輸送隊は必ず  
しもそうではない、と答へた。第六に、  
輸送隊は必ずしもそうではない、と答へ  
た。第七に、輸送隊は必ずしもそうでは  
ない、と答へた。第八に、輸送隊は必  
ずしもそうではない、と答へた。第九に、  
輸送隊は必ずしもそうではない、と答へ  
た。第十に、輸送隊は必ずしもそうでは  
ない、と答へた。第十一に、輸送隊は  
必ずしもそうではない、と答へた。第十  
二に、輸送隊は必ずしもそうではない、  
と答へた。第十三に、輸送隊は必ずし  
もそうではない、と答へた。第十四に、  
輸送隊は必ずしもそうではない、と答へ  
た。第十五に、輸送隊は必ずしもそう  
ではない、と答へた。第十六に、輸送  
隊は必ずしもそうではない、と答へた。  
第十七に、輸送隊は必ずしもそうでは  
ない、と答へた。第十八に、輸送隊は  
必ずしもそうではない、と答へた。第十  
九に、輸送隊は必ずしもそうではない、  
と答へた。第二十に、輸送隊は必ずし  
もそうではない、と答へた。

から十時三十分、および九時三十分の八時は、  
 同様に、八時三十分には三二八、四一六  
 レッドが示されていたこと、実際にト  
 レーラーに送り込まれた一発ずつ計測した結  
 果は、これら二発のトレーラー九台  
 分のHDDの全数検査を合計すると  
 計測で三〇万二、六〇〇ポンド弱とな  
 り、実際には一五〇トン弱が積み出され  
 たことがわかり、この陸軍機と車載機  
 が搭載された茶軍の出発と輸送への引  
 渡す一歩として、この問題は一段落着し  
 た。

しかし、これは一つの事故として扱っ  
 ておかなければならないものであろ  
 う。われわれの分析では仰天以上のミス  
 の連続によるミスと見られる。まず仰天  
 以上のミスについては、茶軍側は一発落  
 のトレーラー台数を五台とする、と発表  
 したわけであって二つの輸送隊が五台  
 ずつであったと説明していなかった、と  
 弁明した。そして一発落のトレーラーを  
 五台としたのは安全確保のための輸  
 送隊であった、それ以上の台数になるこ  
 ともあり得る、とした。この説明には食  
 い違ひがある。茶軍側は茶軍の発表でト  
 レーラー一台分の積荷重量は十五トンで  
 あると述べていたのだが、それによっ  
 て一般には一五〇トンのHDD輸送隊は  
 十台のトレーラーによって行なわれるも  
 のと理解していたのは当然であろう。九  
 台によって行なわれることを早期に広報

すれば一般の不安と懸念を生じること  
 となくすんだのであり、広報作戦にミス  
 のあったことは認めなくてはならない。  
 それはまた輸送隊上のミスに連関する。  
 茶軍はトリステム化の進捗した軍隊にな  
 い。しかも偵察隊で高度に機械化され  
 ており、それがシステム化によって統合  
 される形態となっている。だが、今商の  
 ミスはシステム化が真面目にすすまな  
 った茶軍の部門は、化学兵器・輸送・警  
 備・専門技術・広域など多岐にわたった  
 のだが、このトレーラーの台数のミス  
 は、輸送隊部門が安全確保内の九台に  
 輸送する積荷が五台であったため、安  
 全確保をみなして五台への輸送を行な  
 なったために起こったものである。事  
 実、ランペイト海軍空母で十台と  
 理解して、九台で行なうという誤解  
 は受けていなかった。一つの運送の不備  
 が輸送条件に陥落と不安を生じた事  
 例である。災害を生じなかったミスであ  
 ったため幸いであつたが、どうやらは  
 密に封鎖されたものであつても、ミスは  
 起こり得ることを明らかにした事例であ  
 り、これこそ二〇〇〇パーセントの安全確  
 保が求められてきたのであり、細心の  
 注意を怠ってはならないことを示した  
 のであるといえよう。しかし、これらの  
 ミスに対してランペイト海軍空母、ヘ  
 イス指揮官など茶軍幹部は事前にそれ

認め、改善を待たされた。そして四時三十分の  
 ミスは、われわれも負わねばならない。  
 輸送トレーラー全部の点検を行なつた  
 際、パレットの保持状態、車載機の搭載状  
 態などに注意を集中し過ぎ、トレーラー  
 の台数の正確な計算を落としていた。極  
 めて初歩的な調査事項を落としたので

であつて、首謀を待たされたのである。こ  
 れはトレーラーの車載機をパレットに載  
 せておくべきであつた。  
 「輸送隊」は化学兵器の安全確保の  
 カギを握るものである。その全数にわた  
 った一ミスも生じないよう努めな  
 ければならない。



のであるが、一人も神経ガスに侵されて  
 はいなかった、と説明された。  
 神経ガスを漏洩したのは輸送隊用の毒  
 ガス容器であつて、この種の容器は固  
 体の一部に出入口があり、そこからGB  
 などの液状毒ガスを注入し、その上を  
 二重に鉄製の蓋を重畳して密封す  
 る。しかし、その事故の際には、その密  
 封した蓋の部分にピンホールが生じ、その  
 隙よりGBが漏出したのである、と  
 された。

化学兵器のテクニカル・チームにはI  
 C T 50 (急激な変化) というものがあ  
 り、毒ガス用として使用した目的が五  
 〇パーセント程度の毒ガスの量を示  
 すものである。このIC T 50は「メリッ  
 ラム」の毒ガスの量を測つたものであ  
 る。このGBは Labo Jongman/ant とい  
 うものである。

これは具体的なたとえれば、一方メ  
 ートル中に三〇〇ミリグラムを測定し  
 た装置で三〇〇分間測つたのみで、それ  
 いた人員は三十分には一〇パーセント、  
 六十分には四六パーセント、十五分後  
 は九十五パーセントが死んでしまつた  
 という結果がある、ということである。  
 同様に「メリッラム」(ニリケラム) ほど  
 のGBで人間を倒すことができる。GB  
 などGB系の毒ガスの毒は、色も  
 に臭いもほとんどなく、嗅ぎ始めて初め  
 その存在を知ることがない。故に  
 結果から推察するに、毒ガスを  
 付着させておき、毒ガスを  
 いわゆる毒ガスとして、毒ガスを  
 毒ガスを止めよう、このため、手袋の  
 ほかにも毒ガスのひきとり、金網不織  
 材の着用を止めると、生きたがら  
 ぬまま死んでいくことになるのであ  
 る。

化学兵器に全く事故はないかどうか。  
 これは今回の調査において茶軍側の  
 デ・スカッションにおいて重要なテーマ  
 の一つであつた。  
 われわれは、いかなる化学兵器とい  
 ども「絶対安全」ということの無い点を  
 強く指摘し、一九六九年七月十八日付の  
 茶軍、ウォール・ストリート・ジャー  
 ナルの報道した神農における「毒ガス  
 漏洩事故」問題について正しい広報を  
 求めた。これに対し茶軍側は快く説明に  
 応じ、事故処理に当たった担当幹部自ら  
 説明にその状況を説明した。  
 それによると、茶軍のGBは輸送機、  
 実際に運送したが、それに侵されたのは  
 毒ガス高濃度のワセキ二匹だけであ  
 った、兵員は一人の被害者もなかった  
 というのである。その日、化学兵器部  
 隊員に二十四人の茶軍要員が作務に入  
 ったが、ワセキの脱衣に気づき、直ちに時  
 装を脱いで隊務室で毒ガス検査を受けた

のであるが、一人も神経ガスに侵されて  
 はいなかった、と説明された。  
 神経ガスを漏洩したのは輸送隊用の毒  
 ガス容器であつて、この種の容器は固  
 体の一部に出入口があり、そこからGB  
 などの液状毒ガスを注入し、その上を  
 二重に鉄製の蓋を重畳して密封す  
 る。しかし、その事故の際には、その密  
 封した蓋の部分にピンホールが生じ、その  
 隙よりGBが漏出したのである、と  
 された。  
 事故を起こした神農は直ちに神農の起  
 理前に収容され、コンクリート詰めにな  
 れて危険は防止されたといわれる。そ  
 れで、その後、コンクリートで、二重  
 のバインが入り入れ、一方より毒ガスを  
 注入し、毒性を消去して、もう一方  
 より除去された完全に処分されたとの説  
 明をうけた。  
 そして、このケースでは全く人員に災  
 害の届くことはなく、事故 (Fiasco)

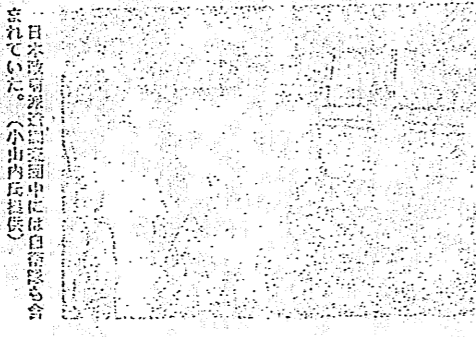
と時を待たずにはなく由茶軍 (GB  
 Dept) である、と説明された。しかし、  
 この説明によって、われわれは毒ガス  
 兵器は事故を起こし得るものであること  
 を再認識した。  
 幸い、事故らしき事故のケースでなか  
 ったことは明らかになったものである  
 が、これは野戦隊内の出来事であつた  
 らば、万一の輸送の際に起こつたとしたら  
 事故として大きいものになつたかも知  
 れない。GBは迅速に毒物の効力を発揮す  
 る毒物であつて、短時間で人間を侵し、  
 死に導くものであるからである。

化学兵器のテクニカル・チームにはI  
 C T 50 (急激な変化) というものがあ  
 り、毒ガス用として使用した目的が五  
 〇パーセント程度の毒ガスの量を示  
 すものである。このIC T 50は「メリッ  
 ラム」の毒ガスの量を測つたものであ  
 る。このGBは Labo Jongman/ant とい  
 うものである。

これは具体的なたとえれば、一方メ  
 ートル中に三〇〇ミリグラムを測定し  
 た装置で三〇〇分間測つたのみで、それ  
 いた人員は三十分には一〇パーセント、  
 六十分には四六パーセント、十五分後  
 は九十五パーセントが死んでしまつた  
 という結果がある、ということである。  
 同様に「メリッラム」(ニリケラム) ほど  
 のGBで人間を倒すことができる。GB  
 などGB系の毒ガスの毒は、色も  
 に臭いもほとんどなく、嗅ぎ始めて初め  
 その存在を知ることがない。故に  
 結果から推察するに、毒ガスを  
 付着させておき、毒ガスを  
 いわゆる毒ガスとして、毒ガスを  
 毒ガスを止めよう、このため、手袋の  
 ほかにも毒ガスのひきとり、金網不織  
 材の着用を止めると、生きたがら  
 ぬまま死んでいくことになるのであ  
 る。

化学兵器に全く事故はないかどうか。  
 これは今回の調査において茶軍側の  
 デ・スカッションにおいて重要なテーマ  
 の一つであつた。  
 われわれは、いかなる化学兵器とい  
 ども「絶対安全」ということの無い点を  
 強く指摘し、一九六九年七月十八日付の  
 茶軍、ウォール・ストリート・ジャー  
 ナルの報道した神農における「毒ガス  
 漏洩事故」問題について正しい広報を  
 求めた。これに対し茶軍側は快く説明に  
 応じ、事故処理に当たった担当幹部自ら  
 説明にその状況を説明した。  
 それによると、茶軍のGBは輸送機、  
 実際に運送したが、それに侵されたのは  
 毒ガス高濃度のワセキ二匹だけであ  
 った、兵員は一人の被害者もなかった  
 というのである。その日、化学兵器部  
 隊員に二十四人の茶軍要員が作務に入  
 ったが、ワセキの脱衣に気づき、直ちに時  
 装を脱いで隊務室で毒ガス検査を受けた

のであるが、一人も神経ガスに侵されて  
 はいなかった、と説明された。  
 神経ガスを漏洩したのは輸送隊用の毒  
 ガス容器であつて、この種の容器は固  
 体の一部に出入口があり、そこからGB  
 などの液状毒ガスを注入し、その上を  
 二重に鉄製の蓋を重畳して密封す  
 る。しかし、その事故の際には、その密  
 封した蓋の部分にピンホールが生じ、その  
 隙よりGBが漏出したのである、と  
 された。  
 事故を起こした神農は直ちに神農の起  
 理前に収容され、コンクリート詰めにな  
 れて危険は防止されたといわれる。そ  
 れで、その後、コンクリートで、二重  
 のバインが入り入れ、一方より毒ガスを  
 注入し、毒性を消去して、もう一方  
 より除去された完全に処分されたとの説  
 明をうけた。  
 そして、このケースでは全く人員に災  
 害の届くことはなく、事故 (Fiasco)



日本政府が公開した自衛隊員が  
 写された。(小山内兵衛提供)

化学兵器のテクニカル・チームにはI  
 C T 50 (急激な変化) というものがあ  
 り、毒ガス用として使用した目的が五  
 〇パーセント程度の毒ガスの量を示  
 すものである。このIC T 50は「メリッ  
 ラム」の毒ガスの量を測つたものであ  
 る。このGBは Labo Jongman/ant とい  
 うものである。

これは具体的なたとえれば、一方メ  
 ートル中に三〇〇ミリグラムを測定し  
 た装置で三〇〇分間測つたのみで、それ  
 いた人員は三十分には一〇パーセント、  
 六十分には四六パーセント、十五分後  
 は九十五パーセントが死んでしまつた  
 という結果がある、ということである。  
 同様に「メリッラム」(ニリケラム) ほど  
 のGBで人間を倒すことができる。GB  
 などGB系の毒ガスの毒は、色も  
 に臭いもほとんどなく、嗅ぎ始めて初め  
 その存在を知ることがない。故に  
 結果から推察するに、毒ガスを  
 付着させておき、毒ガスを  
 いわゆる毒ガスとして、毒ガスを  
 毒ガスを止めよう、このため、手袋の  
 ほかにも毒ガスのひきとり、金網不織  
 材の着用を止めると、生きたがら  
 ぬまま死んでいくことになるのであ  
 る。

化学兵器に全く事故はないかどうか。  
 これは今回の調査において茶軍側の  
 デ・スカッションにおいて重要なテーマ  
 の一つであつた。  
 われわれは、いかなる化学兵器とい  
 ども「絶対安全」ということの無い点を  
 強く指摘し、一九六九年七月十八日付の  
 茶軍、ウォール・ストリート・ジャー  
 ナルの報道した神農における「毒ガス  
 漏洩事故」問題について正しい広報を  
 求めた。これに対し茶軍側は快く説明に  
 応じ、事故処理に当たった担当幹部自ら  
 説明にその状況を説明した。  
 それによると、茶軍のGBは輸送機、  
 実際に運送したが、それに侵されたのは  
 毒ガス高濃度のワセキ二匹だけであ  
 った、兵員は一人の被害者もなかった  
 というのである。その日、化学兵器部  
 隊員に二十四人の茶軍要員が作務に入  
 ったが、ワセキの脱衣に気づき、直ちに時  
 装を脱いで隊務室で毒ガス検査を受けた





